平成27年度青年社会活動
コアリーダー育成プログラム

総合研修テーマ:
生きがいのある高齢者の生活

ドイツ派遣団（高齢者分野）

ドイツ派遣団のメンバー

- 社会福祉法人理事長、常務理事
- 一般社団法人代表理事（箏回想法）
- 精神保健福祉士
- 介護職員兼生活相談員
- NPO法人事務職(経理)
- 作業療法士(3名)

山形県、福島県、三重県、鳥取県、大分県、鹿児島県、長崎県からあつまりました！

団テーマ

ドイツにおける高齢者の**自己決定**に基づく

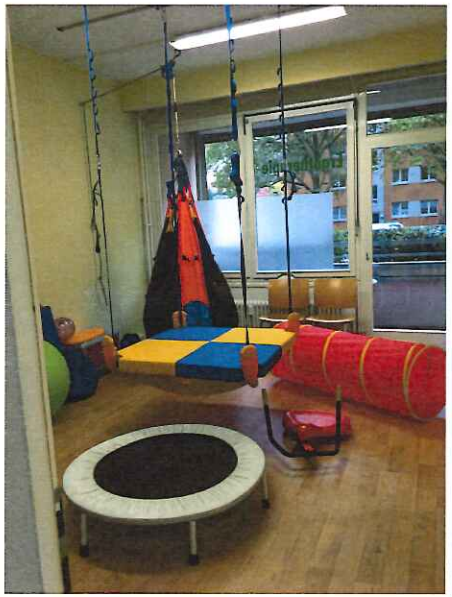
生活を支援する**多様な連携**と具体的手法を学び、日本の地域包括ケアシステムの構築促進に取り組む

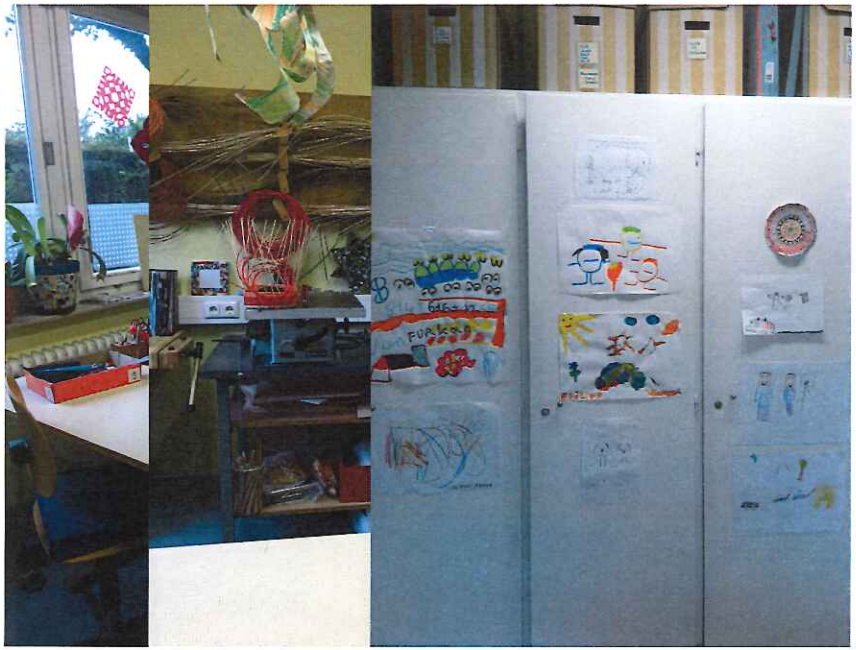
フィットネスセンター

【施設概要】
構成人数：PT8名、OT2名、
フットケアセラピスト2名
対象：50～90歳位の高齢者（整形疾患が多い）
費用：

①基本的なリハビリ
1回約30分を6回に分けて実施して120€（約16.800円）
⇒これらの費用は健康保険組合がほぼ負担
自己負担は19€(約2,660円）
これを3セットまで保険組合が負担
（12週空けばまた治療を再開することが可能）

②健康維持目的のフィットネス等の使用
会費25€（約3500円）が自己負担となる





ZWAR（高齢者近隣ネットワーク）

【施設概要】
高齢者と障害担当がそれぞれ役割を持って、全ての
世代のために生きる価値ある街づくりを理念

①住宅の改善すること
②出会いの場を提供すること
③ボランティア活動を推進すること
④近隣地域における様々な活動を提供すること
⑤高齢者介護や認知症ケアに関すること
⑥健康に関すること
⑦インクルージョンに関すること
⑧多文化やジェンダーに関すること

ZWAR（高齢者近隣ネットワーク）

職員：12名+ボランティア
組織図：行政、宗教関係団体、介護関係の企業
病院、住宅関係、その他の個人
加盟団体の集まり
活動内容：

①55歳以上の人を対象とした身近な相談相手
②地域住民宅に訪問
③活動の場所を提供
④集団で一緒に活動を行う
⇒集団で活動するにあたって、1回当たり45€（6300円）が
自己負担金となるが、払えない人のために補助金もある

地域包括ケアシステムの構築に向けて
5つの要素
（医療・介護・予防・住まい・生活支援サービス）の充実
＋
自助・互助・共助・公助

現在：「介護予防・日常生活支援総合事業」
訪問介護、通所介護の要支援の利用者
⇒地域のボランティアを主体とした支援

⇔

日本：いきいきサロン、民生児童委員の活動
在宅福祉委員の配食活動
・中学校区単位、小学校区単位、自治会単位
・責任者が牽引していく助け合い活動

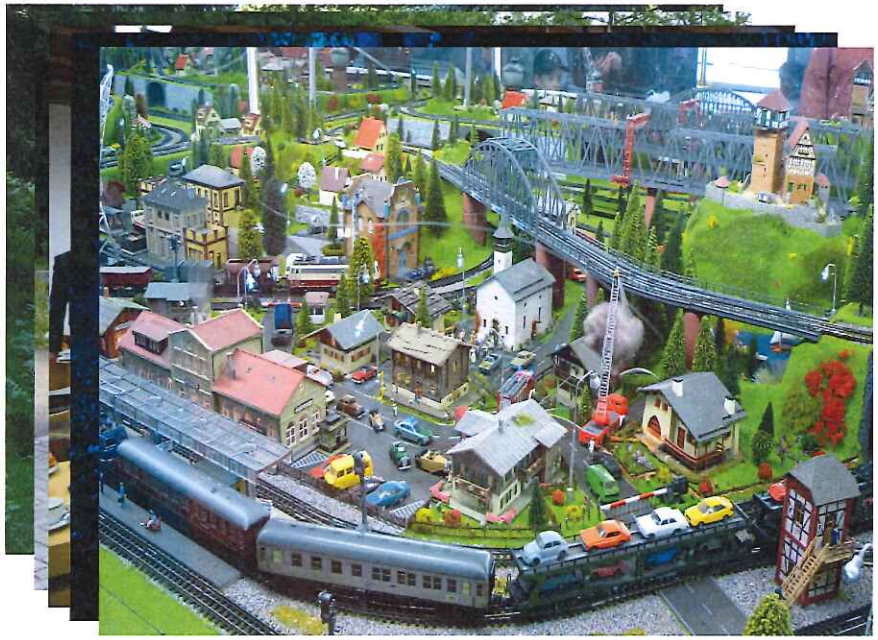
目指すのは“向こう三軒両隣”の助け合いの確立

日本とドイツ

	日本	ドイツ
65歳以上人口	26．7%	21．1%
合計特殊出生率	1．42	1．38

※少子高齢化は同じ
→高齢者が今まで以上に活躍すべき

ZWAR：趣味の活動を通して
助け合いの小集団を作る「支援」組織
・呼びかけは行政によるリーダーシップ
・活動は小集団全員による自主的・自発的なもの
・男性の参加
・市全域が対象
・研修：会の運営方法、仲裁方法
・ボス的リーダーを作らない
→若い時から、将来的の助け合いの関係を作る



日本：「住んでいる場所」を一つの単位
　　責任者のリーダーシップによる助け合い
　　＋
ZWAR：趣味の活動を単位
　　退職後間もない男性の参加
　　リーダーのいないフラットな関係
　　参加する人々が自ら活動を継続
　　↓
互助＝「助け合い」の促進
※ZWARの活動支援の具体的な方法を学ぶ
　日本の助け合い構築のヒントになるか、ZWARの支援方法に取り組むべきか、実際にZWARに携わる人に来て頂き、これらを考える機会を持つことを今後の団の活動にしたい。

SoVD im Gespräch

Foto: Wolfgang Borrs

Eine Delegation aus Japan besuchte die Bundesgeschäftsstelle des SoVD und informierte sich über die Aufgaben und Ziele des Verbandes. Am Rand von Fachvorträgen bestand dabei ausreichend Gelegenheit zum gegenseitigen Austausch.

ハインリッヒ・シュライリヒ・ハウス

・ナイジェリアから来たシスターを雇用
・1グループ10人単位で構成1グループに1人ずつ調理担当と清掃担当
・薬は自己管理
・ビデオカメラは利用者と労働者のため設置しない
・面接チップカードを持っており、24時間面会可能
・管理職はすべての記録に目を通す
・カトリック教徒のための礼拝室を設置

メモリークリニック（精神科病院）

【概要】
記憶力に対する問診・診断（かかりつけ医の紹介）
主に50歳以上
診断の結果　認知症ではない＝21％
　　軽度認知障がい＝34％
　　認知症　　＝28％

【役割】
・認知症の診断）各種相談
・軽度認知障がいの診断）
半年後再診察。その間の地域のフォローを紹介
・入院は30日間）認知症だからではない。

ドイツ社会福祉協議会（SoVD）

・主な活動

①社会福祉相談

②社会福祉に関する政策提言

③余暇を通したネットワーク作り

移民が支えるドイツの高齢者介護

・介護職員の担い手不足
⇒ドイツにおいても課題

・介護職員の半数
⇒移民を背景とする人

～移民が介護職員になるまで～

ドイツ語の習得➡3年間の養成期間➡介護士！

高齢者の声を反映させる

・BAGSO

すべての高齢者の意見を反映させる組織！

・「高齢者にとって優しい町づくり政策」

石畳や信号の長さなど高齢者からの声を政策に反映

介護住宅ユリーロジャーハウス
(Julie Roger Haus)

認知症、LGBTを対象とした施設
施設入居者の約8割は認知症

転倒や火事などはないのですか？

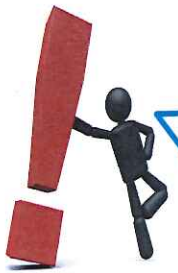
転倒はありますが、転倒の危険性があるのに歩いてしまう、その人の責任です！
火事は火災報知器を2つつけているので大丈夫です！！

抑制帯について・・・

・ドイツでは基本的に抑制帯の使用を法律で禁止
・医療的処置などにより、どうしても抑制帯を使用しなくてはいけない場合、弁護士が立ち合い抑制帯が必要かどうか検討

安全よりその人らしさ
主体性

施設を作るとき、周辺住民の反対などはなかったですか？



施設を作るときに、施設長が周辺住民宅を1件ずつ回り説明を行いました
また、住民や利用者家族の理解を得るため、イベントを行っています！！

You Tubeでも見れますので、ご興味のある方は是非！

キーワード

- 高齢者の自己決定
- 多様な連携

日本で高齢者の自己決定を促すため

・社会参加（余暇活動）を促進する
・高齢者の自主活動支援
・若い世代への啓発（自己決定の大切さと責任）
・安全orその人らしさ（後見人制度も活用）
・パソコン普及率を高める

「高齢者が自分らしく社会参加を送る、ドイツでの豊かな人生とは」

ー作業療法士として、楽しみ・生きがいを
地域社会で活用するための具体的手法の検討ー

今村病院分院　作業療法士　中山　愛

1．高齢期とは・・・。

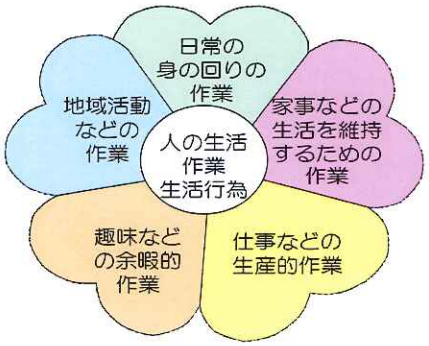
- 老化や病気で心身機能の低下をきたし、これまでできていた家事や余暇活動などの作業が困難となる。
- 退職や家族構成の変化によって自由時間が増えるなど、生活を送るうえで様々な作業の作り直しが求められる時期でもある。
- 健常な高齢者であっても外出機会の減少など社会的な役割を喪失し自宅に閉じこもるケースも少なくない。

２．生活行為向上マネジメントとは。

「高齢者の活動と参加」に焦点をあてた作業療法

「やりたい」「したい」と思っている生活行為の向上を目指す。
一人ひとりの高齢者が望む「活動と参加」の目標を明らかにし（対象者との協働）、その目標の実現に向かい、多職種が協働し、一人ひとりの高齢者の自立生活支援を目指すものである。

作業が人を健康にする



人の営みは作業・生活行為の連続で成り立っている

3.ドイツでの高齢者の生活環境

・在宅、施設問わず「その人らしさ」を重要視する多様性
・認知症を含めた様々な性・宗教を受け入れる。

その人の「ありのままの姿」を受け入れ、尊重する。
（居室の環境、飲酒、喫煙など）

施設でも自宅を感じられる様な環境作り

4.ドイツでは、「自己決定」「自己尊重」

自己決定には「リスク」を伴う。
（BEDからの転落、転倒等）➡ 自己責任
施設側の責任を問われる
ことは少ない。

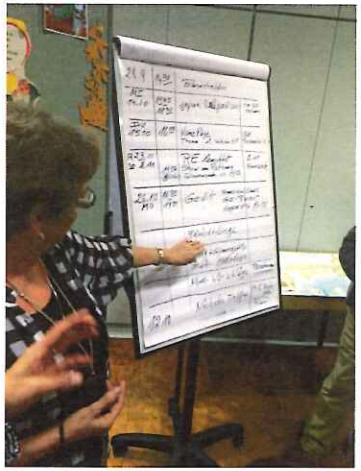
5. 安全性より「その人らしさ」

認知症患者に対し、拘束でなく環境調整を
重視。（徘徊を無理に止めることなく、GPS
の装着や居心地の良い場の提供）
➡発想の転換による対応

「自分が最期まで自分らしくいられる場」
高齢者個々人に応じた興味・価値のある
活動への参加

6.その人らしさとは

7.興味ある活動内容の一例



7.活動を実施していくためには

・高齢者自らが、市民や町の為に役立ちたいという想い

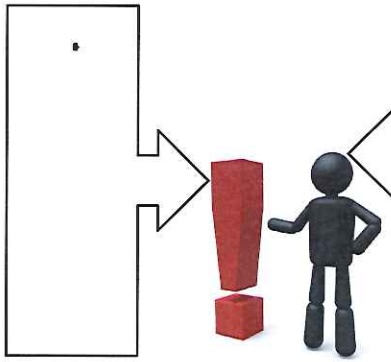
⬇

年を重ねるプロセスに自分の意見を反映させるという「シニアから新しいものが生まれる」という思想、自己の能力を地域の中でどう生かしていくのか。

・高齢者同士がお互いに支えあい、自分の地域の中でどのような生活を送っていきたいのか、自分が決め自分で作り上げる。

自己決定の促進

＜資金＞



市や州が助成金、企業から寄付金、会費、地域住民への活動費、イベントの提供により資金を得る他、場や人件費、啓発活動の為の広告費などをフランクフルト・ベアバンドが負担している。

良い啓発活動の提供

私たちの生活は個々人にとって「意味のある作業」または日常の生活行為の連続から成り立っている。「することがある」というのは、幸せであるのかもしれない。何でも良いわけでない。その人にとって意味がなければならない。人は意味のある作業を続け、その結果から満足感や充実感を得て、健康であると実感する。自分の生活が自分らしいのは、生活を構成する作業に興味があり、馴染みがあるからである。

作業が人を健康にする

自分らしい作業の連続が自分らしい人生を作る。

高齢者が活動的な生活を送るためには、高齢者が継続したいと思う作業が再び行えるようにする支援が求められる。

8.作業療法の目標

個人レベルを超え社会レベルで考えることができる。作業を通じ、充実した健康な生活を送れる社会は、高齢者にとってQOLの維持・向上につながり、地域社会の中で自己を尊重し、その人らしい豊かな人生を送る為に作業が重要な役割を果たすことが理解された。

9.日本で多様な連携を行うために

- トップダウンとボトムアップを使い分ける
- 専門職と地域住民をつなぐためのツールを考える
- 地域ケア会議の活性化
- 地域連携パスの活用
- 企業との連携を強化する
- 施設の資源を地域に提供する
- 多世代間の連携の視点を持つ

今後の活動①

▸報告会
▸啓発活動
▸他分野の施設・団体を訪問、受け入れ
▸行政、社協、企業との連携
▸中間支援団体の活用
▸外出マップの作成
▸多世代交流：幼少期から障害者や高齢者と
交流する場の提供

ご清聴ありがとうございました。

今後の活動②

▸家族介護者教室：自由や自己責任などドイツでの取り組みを伝える
▸行政との連携：担当課長や市長とのつな
がり

▸地域ケア会議への参加、改革
▸日本にZWARを招く